

マハトマー・ガンディーといえは世界的な尊敬を集める聖人であるが、インドの南の方ではあまり評判がよくない。ガンディーは差別を否定したが、カースト制は容認していたからである。そして、南インド、タミルナドゥ州でのガンディーへの批判は、学校での昼食に関わっている。南アジアで人びとが食事を共にするのは、基本的に地位が同じであることの表現である。また、カースト制のもとでは、食事のやりとりにも、地位が上の者は下の者からもらわないという原則がある。だから、最上位のカースト、ブラーマン(バラモン)は、他カーストの人から食事をもらうことはできないし、食事を

みんなく 食の民族誌

考える 舌

21

しているところを見られると命に関わるともいう。逆に、ブラーマンは他の人びとに食事をふるまってもよいわけだから、ヒンドゥー寺院のまわりにある食堂はほとんどブラーマンが経営している。ブラーマンは、地位は高いがそれだけに不自由な人びともある。外国に留学するようなエリートも多いが、食事の面では大変な苦労をする。地域の差はある

聖人ガンディーの誤算

杉本 良男

カースト別の食事容認に悪評

ものの菜食が基本であるが、肉を食べないというだけではない。京都の人は精進料理を食べればいいので



インドの学校で給食を楽しむ子どもたち。1970年代に給食制度が導入されて以降、就学率が飛躍的に向上した(筆者提供)



タミルナドゥ州の州都チェンナイ市内の目抜き通り。右奥のガンディー像よりも中央の当地の映画スターの像が目立っている

はないかと思われるであろうが、魚由来のタシを使っているのが菜食ではないし、海藻やノリなどもだめ

没後70年、論議つきず

である。菜食主義者は、戒律に忠実であろうとすれば、日本では自炊せざるを得ない。卵を忌避する菜食主義者はパンも食べられないことになる。もともと動物供犠への批判から、血を流すことを避けるための菜食主義であったが、今では地域差や階層差が大きい。厳しいところでは、タマネギやニンニクなども忌避されるから、なおの問題が大きいのである。一方、東インドでは魚が許容される菜食主義もある。

でそうでもなくなっている。タミルナドゥ州では1920年代半ばに、非ブラーマンが州の政権を握り、学校でブラーマンと非ブラーマンとが別々に食事をとっていたそれまでの風習を改めようとした。そのころ、国政選挙のキャンペーンに訪れたガンディーは、カースト別の食事を温存しよう求めた。それが聖人ガンディーの南インドでの悪評の一因である。また最近、ガンディーは差別主義だったとする著書も出版されて話題になっている。ガンディーをめぐる議論は没後70年近くになってもつきることがない。(国立民族学博物館教授)